



山田川にかかる永久橋(以前は百目木橋といった)

地名との出会い

川松 博

地名は、その土地固有の風格をもっている。地名の中には、由来のよくわからないものもあるが、多くの地名の呼び名には何らかの意味があり、その土地のむかしやそこに住む人々の生きざまを語ることが潜んでいる。地名は後世に伝承すべき素晴らしい文化遺産であり「ロマン」を秘めていると思っている。

私が、地名に興味をもったのは中学生の頃。休み時間などに地図帳で地名探しをよくやっていた。その時、「長万部」「札幌」「馬籠」「馬頭」などに興味をもった。そして、大学の授業で「水戸の地名由来」という講義を受講してから、本格的に地名に興味をもった。「大工町」「鉄砲町」「鳥見町」などの町名由来に引き込まれていったことを覚えている。

私が自ら地名の由来を調べるようになったのは、教員生活退職後である。常陸太田市社会教育指導員として、生涯学習センターの活動や地域の諸活動にかかわるようになったのがきっかけである。その時から生涯学習情報誌「フォンズ」の「常陸太田の地名話」の寄稿を担当するようになり現在に至っている。

現在は、親子自然探索サークル活動やまちかど案内人として史跡めぐりの受講生たちに、その地域の特徴ある地名の由来を話すようにしている。また、各地の公民館や町内会などの団体が主催する研修会などでも「〇〇の地名話あれこれ」と題してその地域にかかわる地名を取り上げて、地名からその地域の歴史や人々のあゆみがわかるように、わかりやすく話す機会を設けている。

これからも地域に残る貴重な地名を大切に守り、後世に伝えていきたいと考えている。



田の 太陸常 地名話 最終回 特集

二〇〇九年二月発行の四十四号から、不定期連載の「常陸太田の地名話」ですが、コラムをご担当いただいている川松博さんに特集号を組むにあたりいろいろと教えていただきました。慣れ親しんで使っている地名の歴史やいわれなど興味深いお話が盛りだくさんです。ここでは、フォonzに掲載した地名のさらに詳しいいわれをご紹介します。

〔取材〕 塩原慶子、萩谷浩司

『御所車』ごしよぐるま 上土木内町

建武二年（一三三五）、みかの原合戦に勝利した北畠顕家軍が義良親王を奉じて鎌倉に向かう途中、義良親王が乗った御所車が、小川に土橋がかかっている土木内地内の悪路に動きがとれなくなってしまう。そこで、村人たちが協力して無事に通過させたことに由来する地名といわれている。

御所車とは、むかしの貴人が使用した乗りもの。また、御所車は後生車のこととて、風車を作つて死者に冥福を祈った村の風習から生まれた地名ともいわれている。

※みかの原合戦が実際にあったかどうか、学者の間にも諸説がある。



現在の御所車付近

＜参考文献＞
『常陸太田市史 通史編』
『日立市史』
『佐竹読本余録集』高橋茂 著

『万畑』まんばた 赤土町

西金砂そぼの郷「そぼ工房」から赤土川沿いに、西金砂神社に至る道路を北上すると三叉路となる。この手前を左上方に進むと樹林内に「万畑の千年カシ」がある。樹種はウラジロガシで、目通り幹囲七・五メートル、推定樹齢八〇〇年といういかにも古そうな巨木である。八〇〇年というと鎌倉時代……。この長い間をひっそりと過ごしてきたウラジロガシの木。今では子枝、孫枝を繁らせている。

万畑は地名で、治承四年（一一八〇）十一月、源頼朝軍が佐竹秀義軍を西金砂山城に攻めたとき、この山の頂上に、一万本の旗（萬旗）を立てて、陣を張ったことから地名を万旗→万畑と呼ぶようになったと伝えられている。源頼朝時代の金砂合戦を見てきたか……。何とも興味深い巨木である。



万畑の千年カシ

＜参考文献＞
『金砂郷村史』
『環境省巨樹データベース』
『万畑の千年カシ説明板』赤土町会

『茶屋場』ちややば 徳田町

徳田町と福島県矢祭町の県境に明神峠がある。ここを旧棚倉街道、現在の国道三四九号線が通っている。中世には、この峠は「南の関」といわれていたという。

峠の南、国道沿いに茶屋場と呼ばれるところがある。江戸時代には、幕府巡見使が奥州から水戸藩に入る時、水戸藩士はこの峠で出迎えるのが通例であったようである。

この時、幕府の巡見使にご馳走を出して丁重に出迎えることが、『東遊雜記』天明八年（一七八八）十月十四日の記述に記されている。幕府巡見使のために湯茶、食事の接待をした所が茶屋場であったとして、今でもその名をとどめている。



明神峠付近

＜参考文献＞
『新編常陸国誌』
『里美の歴史散歩』
『広報さとみ157号』

『団子売』真弓町

真弓山中には団子売というたいへん興味深い地名が残っている。ここを通る道路は、河原子、大久保、金沢方面から真弓山の大理石採掘場付近を通り、太田方面へと続く生活道路で、別名「塩の道」とも呼ばれている。かつては多くの人たちが利用していた。

真弓神社は漁民を守る神社として崇められ、久慈浜や河原子方面からの多くの参拝者がいた。この道は大久保、金沢から出合い坂く堀切（火防線）く真弓く太田へと続く道で、堀切を過ぎると茶屋があった。この茶屋では、旅人や参拝者のために団子売を売っていたという。そこから、この地名が生まれたといわれている。



団子茶屋があったといわれるところ

<参考文献>

『茨城県地名大辞典』角川書店 編

『地名を訪ねて』瀬谷房之助 著

『ふるさと世矢故きを温ねて』橋松壽 著

また一説には、真弓神社の例祭の日に、表参道登り口の鳥居付近や堀切を過ぎて、大理石採掘場へ下るところ付近に団子売を売る露店が出たためと地元の古老は言っている。いずれも旅人や参拝者のために団子売を売る茶店があったための地名と考えられ、かつて多くの人たちが行き交った「塩の道」の存在がなつかしく偲ばれる。

『百目木』天下野町（表紙写真参照）

川にまつわる地名には、川や泉などの他にドウメキ、ナメといった様々な名まえがある。加藤寛斎の『常陸国北郡里程間数之記』には、山田川は水府の中染から天下野の境にかけて溪谷をなしていて、ドウメキと呼ばれていると記されている。天下野側の集落名も百目木となっている。山田川の急流をドウドウと轟音をたてて水が流れることが、リアルに表現されている。地名の由来には二つの説があるという。

百目木（鬼）とは守護獣のことで、聖山（東金砂山）を守るけものを表す。二つには、「とう」と「とう」十と十が二つ重なりと百。目木は接頭語「めく」の活用形。つまり、水がドウドウと音をたてて流れているさまを表す。

掲載した地名リスト

【地名】	【掲載号】	【発行日】
1 猿ヶ橋	44	2009.2/10
2 落合	46	7/10
3 瑞龍	50	2010.4/10
4 天下野	52	9/25
5 三才	53	12/10
6 幸久	56	2011.7/10
7 竜黒磯	58	12/10
8 堅磐	59	2012.1/25
9 世矢	62	9/25
10 笠石	64	2013.2/12
11 佐竹・久米	66	7/10
12 機初	67	9/25
13 山田	69	2014.2/10
14 佐都・里野宮	70	4/10
15 賀美	71	7/10
16 千寿	72	9/25
17 金井	73	12/10
18 百目木	74	2015.2/10
19 太田	75	7/27
20 金砂郷	76	9/10
21 水府	77	2016.1/12
22 里美	78	4/13
23 土木内・御所車	79	7/11
24 玉造	80	10/11
25 西宮	81	2017.1/10
26 中染・東染・西染	82	4/13
27 和見	83	10/10
28 磯部	84	2018.4/12
29 島	85	10/10
30 花房	86	2019.4/11
31 徳田	87	10/10
32 和田	89	2020.9/25
33 亀作	90	2021.4/12
34 常福地	91	9/24
35 茶屋場	92	2022.5/25
36 団子売	93	10/25
37 万畑	95	2023.10/25
38 能楽	96	2024.4/25

<参考文献>

『水府村史』

『茨城県地名大辞典』角川書店 編

知りたい「地名」募集！から

九十六号で皆さまの知りたい地名を募集したところ、たくさんのお葉書をいただきました。ここではご応募いただいた中から、川松さんにいくつかお応えいただきました。

『馬場』馬場町 誉田地区

鯨ヶ丘の北部に位置する馬場の街並みは、馬場八幡宮を門前として形成された集落である。



馬場八幡宮



流鏝馬が行われた門前

馬場の地名は、誉田（佐竹）

八幡宮の門前にあたり、流鏝馬などの神事を行う地であることに由来するといわれている。なお、誉田の地名は、馬場八幡宮のご祭神である誉田別命に由来するといわれる。

『観音坂』馬場町

この坂は、旧棚倉街道で町屋、棚倉を抜けて奥州に向かう古くから開けた道路にある。佐竹氏初代昌義が、現在の馬場共同墓地の西側に馬場八幡宮の門前にあたり、流鏝馬などの神事を行う地であることに由来するといわれている。なお、誉田の地名は、馬場八幡宮のご祭神である誉田別命に由来するといわれる。



観音坂

幡宮の中宮寺として建立した「観音寺」に坂の名は由来するという。

『鯉沼』馬場町

むかし、鯨ヶ丘台地の東側一帯は、土地が低くガマや葦が生い茂る湿地帯となっていた。土地が低いために水がたまりやすく、フナやコイが生息する沼などがいくつもあったので、鯉沼と呼ばれていた。その一部が、今でも馬場の小字名として残っている。



鯉沼地区付近

地名由来の調べ方

川松博さんが地名を調べる際のポイントと参考文献をおうかがいしました。



川松博さん

私が地名の由来を調べるときは、

一、第一にその土地に足を運び土地の様子をくまなく調べることから始める。その土地の山や河川、湖沼などの地形の様子、水田や畑地などの土地利用の様子、土地の高低などの地形の特徴を調べる。また、その土地の特徴的なものは何かも調査する。地名は、その土地の何かを表していることが多いので、できるだけその土地を歩いて実際に自分の目で確かめるようにしている。

二、可能な限りその土地の古老から話を聞いて、その地名に関する情報を得て、まとめるときに参考にしている。

三、その地名の由来について、いろいろな文献や地名語源辞典により情報収集をする。

『西河内』西河内上

・中・下町

「河内」とは、カワチ、カワウチ、カチ、コウチ、ゴウドなど様々な呼び名がある。

河内とは、

一、川と川の間にある土地

二、川沿いに開けた土地

の二つの説がある。

ここは、里川中流の西側の支流沿いにあたることから「二」に由来する地名と思われる。

なぜ、「ごうど」と呼ぶかについては、はつきりとわかる史料はない。地元の古老の話によると、里川を流れる水が石に当たり、ゴウゴウと音をたてることから由来するという。



上町の高宮神社

また、「河」は「こう」「ごう」とも読み、「内」は「ない」「だい」「どう」とも読むため、「ごうどう」となり、「ごうど」とつまったものとも考えられる。

『芦間』芦間町

むかし、この地の山田川左岸一帯には、葦が生い茂る湿地帯が広がっていた。アシ(悪)

マ(間)の意味がある。(『茨城県史料—中世編—』より)

「葦」や「悪」には縁起のよい「芦あし・よし」という文字を使用したものと思われる。

芦間には、佐竹四代秀義が金砂合戦までの青年時代を過ごした佐竹屋敷があったといわれている。



芦間の水田と集落

『学道内』下宮河内町

地元では「学道宿」ともいう。「学道」とは、仏道を学び修行すること。「内」は内部の集落をいう。(『地名語源辞典』より)

「学道内」とは、仏道を学び修行する僧侶が集まって生活している集落のことと考えられる。

下宮河内駐在所付近からかなさ笑学校の三叉路付近までのところ。かなさ笑学校敷地には、むかし、学道寺があり、また、近くには金砂本宮神社の別当寺の定泉寺があったという。これらの寺院などで仏道修行に励む僧侶たちが住んでいたところと思われる。



学道内の町並み

四、地名の由来は、元茨城大学教授堀口友一氏によると、おおむね次のように分類されるという。私はそれを参考にしている。

(一) 自然的事象に由来

- ・位置に関する地名(南町、東町)
- ・地形に関する地名(バツケ、富士山)
- ・河川や湖沼に関する地名(江川、江向)
- ・草花や樹木に関する地名(萩塚、柳町)
- ・動物に関する地名(猿谷、馬場)

(二) 人文的事象に由来

- ・土地の機能に関する地名(古宿、大工町)
- ・神社や仏閣に関する地名(宮町、寺西)
- ・開発に関する地名(新田、新地)
- ・地目に関する地名(七反、五反田)
- ・縁起に関する地名(栄町、徳田)

(三) アイヌ語などに由来(長万部、札幌)

以上のようなことを通して、自分の考えを入れながら由来をまとめていく。地名には、確固たる史料に明記されているものは少ない。ほとんどの地名は、学者や研究者がその土地を調査したり、書物などの文献史料を基にして、私見を入れながらまとめたものが多くみられる。だから、地名の由来は奥深く、興味深いものになる。

市内にある興味深い小字名の由来

常陸太田市内には、数多くの小字名があります。耳にすることが少なくなりつつある小字名にもその土地の様子や歴史、そしてそこに住む人々の生きざまを語る言葉が潜んでいるそうです。

『おかえり』下宮河内町

ここは、下宮河内町上中沢から赤土町万畑に抜ける道路の峠付近に位置する。以前は、ここで行き止まりだったとのこと。ここに住む古老の話では、ここから先は道がなくなり行き止まりなので、ここに用事がなければ帰ってください。「おかえりください」から由来する地名だという。

また別な話として、「岡入^{おかい}」がなまって「おかえり」になったとする説もあるという。ここは、比較的高い平らなところへの入口という意味と思われる。調べる前までは、この人たちが子どもたちに、学校帰りには「おかえり」とやさしく声をかけたことに由来する地名と思っていたので意外だった。



峠付近とおかえりの集落

<参考文献>
『金砂郷村史』
『地名語源辞典』山中襄太 著

『鬼越』岡田町

真言宗普門寺が位置する付近から東側一帯のところ。地名の由来には、いくつかの説がある。

- 一、むかし、この付近には鬼が出没するので、「鬼子居^{おにごい}」と呼ばれた。
- 二、この辺一帯は、高井地区から岡田方面に行くのに、山の木々がうっそうと生い茂っているところ。荷物を持ってやっと越えられるところから「お荷越え」と呼ばれた。
- 三、修験僧の叫び声が、鬼の声にきこえたので、「鬼声」が「鬼越」になった。



鬼越付近の様子

<参考文献>
『常陸太田市史 通史編』
『茨城県地名大辞典』角川書店 編
『地名語源辞典』山中襄太 著

『和見』大中町

和見には、南和見と北和見の小字名がある。地名由来には、二つの説が考えられるという。

- 一、山あい、谷あいという地形に由来するという説。和見はこの他に「和味」とも書かれ、これは、山あい、谷あいを意味することばである。
- 二、和見は「和路^{わじ}」がなまったものらしく、道路に關係する地名という説。

和見の近くには、むかし、官道^{かんどう}の雄薩^{おさつ}駅家があつたことが有力になっている。和路とは、官道を意味することばである。この二つの説には、由来を定義づける確かな史料はない。和見を通る道は、旧水府村高倉より国道三四九号線を横切り、根岸に向かっていく、古くからの道である。和見の古老は、「むかしこの山道は、高倉からの本通りで、人の往来も激しかった。結婚式の赤いしめ縄を積んだハイヤーも通って、折橋の立派な道路ができる前は貴重な道でした」と話していた。



南和見の集落

<参考文献>
『里美村史』
『茨城県地名大辞典』角川書店 編
『広報さとみ157号』



思い出の
絵本

『ちいさなジャンボ』

小室 太（下高倉町）

このたび絵本の感想文を書く機会をいただきましたが、最初に思いついた絵本は既出のため、図書館で他の絵本を探していたところ、アンパンマン以外のやなせたかしさんの絵本にすることを思いつきました。

そもそもアンパンマンと月刊詩集しか知らなかったのですが、このたび従軍経験があることを初めて知りました。戦争の話を書いたこと、え、あかるく終わらせたところが素晴らしいと思いました。

戦争で片腕を失って帰ってきた私の祖父は、私が幼少だったからなのか？話したくない体験だったのか？私に戦争の話をするとはなく、いつもニコニコしていた記憶だけが残っております。

唯一怒ったのは、湯呑を洗剤で洗った時だったらしく、こだわりもありつつ「できないのはリボン結びのみ」とハンディキャップを笑い飛ばしていたおじいちゃん。私とおなじ慢性病をもっていたおじいちゃん。そんなおじいちゃんが大好きでした。

そして祖父母の五十年祭の開催がこのタイミングで浮上してきたのも、何かの縁なのかもしれませんね。



やなせたかし 原作/サンリオ



『ハレシルク』ハンドメイド雑貨 teg-teq

快眠サロン「ぐっすり」

〔取材〕塩原慶子

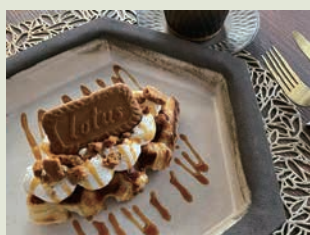
新宿町にある一軒のおうちがハレシルクさんとしてオープンしたのは二〇二二年の十月でした。

teg-teq（以下テクテク）さんという雑貨の自宅ショップなどのオーナーだった鬼澤友季さんとリラクゼーションサロンをしていたお姉さんの川崎友佳子さんが二人でオープンした新しいお店です。

元々は鬼澤さんのご実家で、ご両親を見送ってから空き家になっていたところを、地域の方がふらっと立ち寄ってくれる場所として活かそうと始められたお店です。

一階が鬼澤さんの雑貨とカフェのお店「テクテク」、二階が川崎さんの快眠サロン「ぐっすり」（不定愁訴や心身のケア、自分の身体を自分で養生する活動）、その二つのお店がある建物をハレシルクと名づけ運営しています。

テクテクに集うのは雑貨やカフェを楽しむにぎやかな方が多く、ぐっすりのお客様はその名の通り、静かにリラクセスしたい方が多いため、営業日を分けています。



〔メニュー〕

クロッフル各種 500円～
コーヒー、紅茶、ほうじ茶 350円
アイスコーヒー等 400円～
きまぐれパフェ 700円 など

ハンドメイド雑貨 teg-teq

営業日／水曜、木曜、金曜
営業時間／11:00-16:00

快眠サロン「ぐっすり」

営業日／土曜、日曜、月曜、火曜
完全予約制

住所／常陸太田市新宿町391-26
電話／080-5463-5824

鬼澤さんは雑貨やお菓子を販売するマルシェイベント「nozo~color」の主催者の一人として二〇〇八年から活動が続けてきました。コロナ禍でイベントが開催できないことが続いた期間を「未来をたのしむ準備期間」にしようとして「ハレシルク」の企画を温めオープンにいたったそうです。ハレシルクのご近所さんは、鬼澤さんが子どもの頃から顔見知りの方ばかりで、空き家になっていた場所の活かし方を考えている二人を応援してくださり、オープンの日はご近所さんの拍手をいただいたことが「忘れられません」と鬼澤さん。

社会福祉協議会主催の「オレンジカフェ（認知症の方とその家族、支援者が一緒に集い、認知症のことを理解しながら仲間とつながる場）」を定期的に開催したり、元小学校養護教諭の方と肩の力を抜いてお話をする「まちの保健室」なども開催しています。

おすすめのクロッフルとアイスコーヒーをいただきながら、街にこのような空間のある喜びをしみじみと感じさせられました。

新太田点描 32

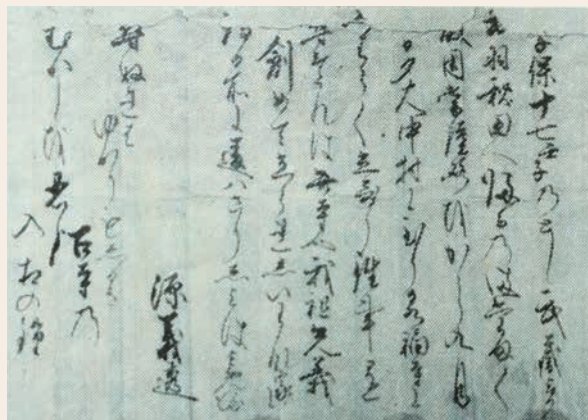
今宮義透と松庵寺

享保十七年（一七三二）九月初め、秋田佐竹藩家老今宮義透は江戸から秋田への下向の途次に太田増井の正宗寺を訪問しているが、これについては先にフォンス第六十七号で紹介している。

今回はその後の足取りについて少しく辿ってみたい。正宗寺の訪問を終えた義透は棚倉街道（小里街道）を北上して大中村（現・大中町）に至っている。ここにはかつて小里城主今宮氏の菩提寺の松庵寺があったが、佐竹氏国替え時に松庵寺も今宮氏と共に秋田角館に移っていた。その跡地に引き寺されたのが小木津村（現・日立市）の泉福寺であった。義透が訪れたのはこの泉福寺と云うことになるが、ここでも正宗寺訪問の時と同様に往時を懐かしんで一紙認めている。

享保十七壬子のとし武蔵より
出羽秋田へ帰るのまたまた
故国常陸路をかり九月
口日夕大中村に至り泉福寺二
しばらく立寄り往事を
尋ねれば此寺や我祖光義
が創めて立られしいわれ家也
帰る所に違ハさりしよめると
源義透
尋ねればゆかりも志るき
古寺の
むかしを忍ふ入相の鐘

但し、今現在この文書は、所在不明となっているので不明瞭ながら『里美村史』掲載のものを掲げておく。



ところで、今宮氏初代の永義は佐竹氏十五代義舜の長子であったが庶子（側室の子）だったので宗家から別れて今宮神社で元服して今宮氏を名乗り修験者として宗家を支える立場となっていた。

当時、常陸国と陸奥国の国境に接する小里地方（里美地区）と磐城南郷地方（矢祭町、塙町、棚倉町）は佐竹氏と白河結城氏の争奪の地だったので、佐竹氏はこの地を占拠して支配下に置いたため小里城を築いて今宮永義を城主として配置した。小里城には二代光義、三代道義と居住したが、慶長七年（一六〇二）宗家佐竹氏と共に羽後秋田に移り、領内の角館に所領を得て小里城時代の家臣を組下預かりとして支配している。

その後、今宮氏は四代義賢、五代義教、六代永教と家系を継ぎ七代目が義透である。義透は義教の末子で永教の弟にあたるが永教に子供がいなかったなのでその養子となり七代目を継いでいる。

義透は元禄四年（一六九一）二月生まれ。幼名は圭之助、後ち又三郎と改めた。諱も初めは光泰、その後光冬と改め、享保元年（一七一六）今宮氏の家督を継いだ時に義透と再度改名している。また通称を大学と称した。享保六年（一七二一）閏七月から延享二年（一七四五）まで二十四年間に亘って秋田佐竹藩の家老職に就いている。宝暦三年（一七五三）九月六日死去、享年六十三歳。

義透が江戸から秋田への下向の折に、態々水戸徳川家支配の常陸国旧佐竹領を訪れ佐竹氏歴代の墓のある嘗ての菩提寺正宗寺や松庵寺跡に建つ泉福寺を訪れると云うのはそれなりの覚悟を持っていたと思われる。また慶長七年の国替えで常陸国を離れてから百三十年後に先祖由縁の菩提寺参りは感慨一入のものがあつたであろう。

左に掲げた肖像画は今宮義透であるという。

（小妻町 吉成英文）



（ひたちなか市 大山富彌 氏所蔵）